

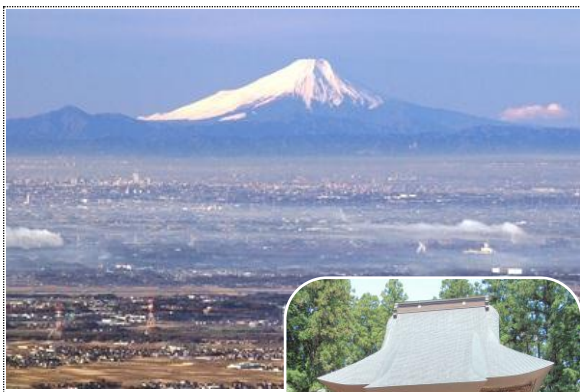
平成25年7月2日

茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会日本館活用委員会
HP <http://www.sin-syu.jp/>

←
関八州の重鎮「筑波山」から見た富士山。眼下には「沃野一望数百里」の眺望がひろがっています(『とぼとぼ山歩き』HPより転載)

校歌に謳われた沃野 (その2)

「♪沃野一望数百里…」と、1911(明治44)年に制定されて以来、ずっと歌われてきた本校校歌。そして誰もが意識する“歌い出しのフレーズ”「沃野」。作詞した堀越晋先輩(中11回卒)が、この「沃野」にどんな“思い”を込めたのかを探るべく、今号も土地の生産力に着目しつつ、近世の「石高制」や「新田開発」について述べてみます。



→
土浦中学校 4年生(16才)のとき、本校校歌を作詞された堀越晋先輩(中11回卒)が眠る盛賢寺



石高制と一国御前帳

秀吉による太閤検地では、知行高が、支給される米の容積による「石」(石高、石Ⅱ石・斗・升・合の榊目の単位、1石Ⅱ約180^リ斗)で表され、これが石高制の確立に帰結していきます。そして、江戸時代に入り本格的な貨幣鑄造が行われるに至っても、石高制は維持されました。そのため、江戸時代は、田畑屋敷などの土地の価値に至るまで、面積に石盛という一定の計数をかけて米の生産力に換算して表示されてきました。また米以外の農作物や海産物の生産量をも米に換算して表されました。もちろん、大名をはじめとする武士の所領からの収入や俸禄を表す場合も石高が用いられました。

豊臣政権で、もう一つ注目したいのは、全国統一が完成した翌年の1591年に、諸国に対して「一国御前帳」の提出を命じたことです。これは、翌年の人掃令と合わせて朝鮮出兵に備えた兵糧・軍役負担を確保するために、大名の領知高を確認する点を第一の目的としていましたが、結果として、日本全国の土地を同一の基準をもって把握するものとなりました。そして、この「大名の領知高を確認する」手法については種々雑多でした。長宗我部氏の土佐一国9万8000石は、実際の検地によるものではなく、同氏が動員可能兵力からの逆算といわれています。また佐竹氏や島津氏などに対しては、石田三成ら奉行が軍役負担などの政治的必要性から石高を操作していたことも知られています。さらに、領内で米がほとんどとれず、もっぱら貿易による利益に依存していた対馬の宗氏や蝦夷地の松前氏は、実際には無高もしくはそれに近いにも関わらず、



「常陸国那珂郡上河内村検地帳」。上河内村は現水戸市内。石田治部少輔は石田三成(「茨城大学図書館」より転載)

利益から計算された形式上の表高があったえられていました。また一部の地域では、国人や農民による一揆を恐れて、検地そのものを行わなかったと言われていす。しかし、そうした地域でも、全国的な流れの中で、石高表記以降は、検地を受け入れざるを得ませんでした。

いづれにせよ、近世社会においては、石高制の確立と人掃令、武士の城下町集住政策により、兵農分離が進展するとともに、城下町の整備も進みました。また石高制は武士・農民だけの関係ではなく、これに基づき、公家や寺社も公儀(幕府・大名)から所領を与えられ、町人は農民の石高に代わる各種の役負担を求められました。そうした負担体系の相違が、農民・職人・町人の最大の違いでした。

ところで、一石は、大人一人が1年に食べる米の量に相当することから、これを兵士に与える報酬とみなし、石高×年貢率と同じだけの兵士を養えることになりました。つまり、石高は戦国大名の財力だけでなく、兵力をも意味していました。また、江戸時代の軍役令では、大名は幕府により表高1万石あたり約200人程度の軍勢を動員する義務を課せられていました。ただ、石高は一般に玄米によるものが常で、実際には成人男性で1日玄米5合、年間玄米約1.8石が標準的に支給されていた。今日、我々はどれほどの

米を消費しているのでしょうか。米以外の穀物を消費する割合も増えて副食も豊かになったことから、成人一人あたりの消費は白米約0.4石と考えられています。



江戸時代に、土浦地域を支配した土屋氏の居城「土浦城跡」。この太鼓櫓門は土浦城のシンボルで、江戸時代前期の遺構としては関東地方で唯一の櫓門遺構です。明治30(1897)年に本校(当時の校名は「茨城県尋常中学校土浦分校」)が創設された新治郡役所は、この門を入った本丸御殿跡に建っていました。

江戸時代の石高制

江戸幕府が成立すると、改めて全国の石高の再確認が行われ、1607年には、大阪の役及び初期の各種普請による論功行賞がほぼ終了して、2代将軍徳川秀忠より諸大名に対し改めて所領が認知されました。そこに表された石高が「表高(おもてだか)」と称され、幕末までほとんど変わることがなかったのです。実際の大名の所領では、新田開発や検地の徹底によって実際の年貢賦課の基準となった実質の石高の「内高(うちだか)」との差は広がり、表高は家格を示すための数字に過ぎなくなっていました。その一方で、農村では内高から算出される年貢負担等が実際の負担と合致するように抜かりなく注意が払われ、それまで村全体の石高(村高)でしかなかったものが、個々の土地にも適用できるようになりました。

石高制の定着によって、幕府は、大名の所領規模を簡単に把握できるため、加封・減封・転封や飛地（例えば、仙台伊達氏の飛地が現在の龍ヶ崎市に1万石ありました）の処理が簡単に行えるとともに、大名に課する負担や幕府役職の任免も石高に応じたものに差配できました。また、大名も自己の藩において石高制を採り、家臣を所領である給所には住まわせず、年貢徴収や人夫動員も藩中央で取り仕切ることができました。農村でも、検地の徹底によって検地帳に石高が記載されるようになり、年貢は石高に年貢率を掛けるだけで算出され、雑税や夫役も同じような方法で課されました。

換言すれば、石高制は、封土を上から順次分割給付して主従関係を保ち、家臣間・農民間においては石高の多寡により上下関係を決定づけていました。そののみならず、複雑な面積計算をすることなく、石高に合わせて増加・減少・交換を可能にするという幕藩体制を維持・存続させるには、好都合な制度だったのです。ところが、18世紀になると、新田開発等に伴う米の生産量の増大による米価の不安定化が大きな問題として登場してきます。米価の下落は、米を売ることによって得た貨幣で生活する武士階級にとっては、収入減となり生活を逼迫させました。逆に、米価の高騰は、消費者である民衆の生活を逼迫させました。16世紀末の貨幣価値の不安定化による通貨制度の混乱を背景に、米が代用貨幣として通用していた時代に導入され、確立された石高制は、三貨（金・銀・銅）によって貨幣制度が安定化することで、支配階級である武士の窮乏化を招くという弱点を露呈させてしまったのです。このため江戸幕

府は、米価安定化のために様々な措置を講じていきました。しかし、最後まで幕藩体制の根幹に関わる石高制そのものの改革には、手を付けることはありませんでした。



新田開発

江戸時代に開発された土浦市の藤沢新田。肥沃な沖積平野が広がる桜川沿いにあり、生産力が高いそうです（上）。この新田開発に尽力した杉田庄右衛門らが同地に創建したという別雷神社。雨乞いの神である雷神を祀っています（右）

太閤検地時点でのわが国の耕地は約200万町歩（約200万ヘクタール）と推定されませんが、270年後の明治初期には、約400万町歩に倍増しました。またこの間の石高は約1800万石から約3200万石に、村の数も江戸初期の5万数千から幕末期の天保5（1834）年には6万3500余に、それぞれ増えました。これらは正確な全国統計の数字ではありませんが、江戸時代を通して、耕地・石高・村数ともに増加したことは確実です。その主な要因としては新田開発があげられます。そもそも新田開発に拍車がかかったのは戦国時代で、各大名が国力増強のため農地開拓に積極的に取り組んだからでした。そのため、戦国末期から江戸初期にかけて食糧の増産がなされ、人口も増加しました。しかし、人口増とともに主食である米が不足し、17世紀には、江戸幕府や諸大名の奨励のもと、役人や

農民主導で、湖・潟・浅瀬などの干拓が行われました。その後、丘陵地帯や台地谷津（やつ）：台地と台地の間の谷間の湿地帯）など、内陸の荒地でも新田の開発が進められました。その結果、江戸時代を通して、全国の石高は1.8倍に拡大していきました。特にそれまで畿内に比べ開発が遅れていた東北・関東・中国・九州などで、農地が格段に増大したのです。新田開発を活発化させた背景には、測量技術の向上があります。大量の水を必要とする水田では、自然の降雨のみでは不可能で、灌漑用水の整備が不可欠でした。しかし、平坦地や緩やかな傾斜地では水路の掘削は難しく、戦国時代以前は一定以上の傾斜地でないとい田の開拓は不可能だったのです。それが、幕府・大名主導の大規模な測量によって、平地に開拓された水田への水供給が可能になりました。逆に、水はけの悪い湖沼や泥湿地のような場所では、大規模な排水路を整備することで水田開発が手がけられました。さらには干潟等における干拓工事による水田化も推し進められました。幕府は、17世紀後半に無謀な新田開発を抑制しましたが、8代吉宗の享保の改革では「見立新田十分の一法」などを施行して、開発者の利益を保証することで、商人等の民間による新田開発を奨励しました。その後も、多くの将軍や老中が新田開発を政策の軸に据えていきました。新田の開発については、初期にあつては官営（代官見立新田）天領代官が主導・藩営新田）が中心でしたが、中期以降は民営（村請新田）農民が村全体で資金や労力を出し開発・町人請負新田）資金力のある都市商人が開発し、小作を雇って耕作）が主流となっていきました。

ところで、新田開発にも問題点がありました。巨額の利益を期待して取り組んでみても、開発が難航し資金難で破産する者がたり、そもそも早魃や水害の多発地で開発されなかった荒地や沼地、山林だったため、開発後に水害で破壊されたり、早魃によって近隣の村との水争いが発生したりしたことなどです。最大の失敗例としては、下総国の印旛沼・手賀沼がよく引き合いにだされます。近隣農民が何度も干拓に挑んだものの、利根川水系からの水の逆流によって失敗を繰り返しました。老中田沼意次や水野忠邦らによる、幕府直営の巨費を投じた開発も試みられましたが、水害による堤防・新田の崩壊・財政難・老中失脚等により、成功を見ることはありませんでした。いずれも第2次世界大戦後になるまで本格的な干拓・農地化は成功しなかったのです。（次号に続く）（高21回卒 鈴木義人）



幼い頃から堀越先輩が目にした忍瀬川と筑波山の風景（上）美田に囲まれたのがな集落そこに竹む堀越氏の生家（左）

日本館が8月にNHKテレビ登場

7月1日（月）に、本校日本館でNHK-BS「ザ・プレミアム」零戦搭乗員たちが見つめた太平洋戦争」のロケ撮影が行われました。放送は約1ヶ月後の8月3日（土）と8月10日（土）のいずれも21時～22時30分です。